

詩編 第126編 5～6節

「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。」

任されたことを忠実に果たすなら、必ず報われる。正しく使命を遂行するなら結果がともなう、との慰めや励ましにも聞こえる。それにしても、涙がある。種蒔く者には多少の不安はあれ、期待して畑に出向くときではないだろうか。種入れをかかえ、実りのときを想像して種を蒔くのではないだろうか。しかし、涙とともに、泣きながらとある。蒔き手が過去に経験した現実があまりにも険しいものであったらだろうか。過酷な状況下で、なお出て行かなければならなかったからだろうか。それでも出て行き続け、そこから経験した喜びを叫んだらだろうか。

懸命に働いてもときには、不安が現実となり、期待が裏切られることもある。それでも、この農夫のように声をあげることが出来るだろうか。歌えるだろうか。それとも涙とともに、泣いたまま帰るだろうか。それはない。

農夫は土地の出来事だけを歌っていない。農夫は地に立ち、種を、刈り入れ時を、束を抱えること、そして彼の全てを支配される主なる神を知っている。主なる神の支配に立つ者は、喜び叫びながら主なる神に帰って来る。